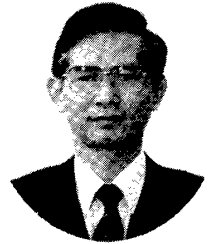


寄書

独創的なコンセプトを期待する

森 健 一*



日本の科学者や技術者の独創性についての議論がされるようになってから久しい。日本人には独創性が少ないことを言いたいために、遠い農耕・狩猟時代の民族的な系譜を持ち出してきて論ずる人もいる。たとえば、日本人はもともとが農耕民族の子孫であるから、同じ土地にどっかと腰を据えてコツコツと時間をかけて育て上げていくような仕事が得意である。欧米人は狩猟民族の子孫であるから、常に違った土地に移動し、何か新しいものに取り組むような仕事が得意である。このような民族的な背景から、日本人は改良的な研究にすぐれており、欧米人は独創的な研究に才能があるのだとするわけである。これとは反対に、日本人でも欧米人でも人間はすべて同じように創造性を備えていると考え、これが十分に発揮されないのは、民族によって、あるいは国や組織によって、人間本来がもっている創造性の発揮を妨げている何かがあるからであると考える人もいる。日本の場合は、これまで社会が必要としていたのが先進国の技術導入や改良であったから、研究組織も全体優先型であることが必要であった。これから個性を尊重する個人優先型の研究組織にしていけば、日本人でも本来もっている創造性は必ず発揮されると主張している。いずれにしても、現在日本では、より独創的な研究が必要とされていることは間違いない。

人工知能の研究も、そのコンセプトの多くは欧米の研究者からきている。日本が欧米の研究に追いつき追い越せとばかり研究のテンポを上げると、貿易摩擦のようにまた非難されるようになるかもしれない。日本は儲かるようになると大勢の人が研究開発にかかわり、性能の良いものを安く作り大量に輸出して、パイオニアが苦労してきた技術の果実の一番良いところを食い荒らしていくと言われそうである。日本人が人工知能の研究で独創的なコンセプトの創出によって貢献できないものだろうか。

現在の人工知能は、論理的な側面や推論的な機能の実現が強く意識されているが、人間の頭脳の生理学的な研究からは、このような機能は左脳にあるとされている。パターン認識の機能や直感の機能のように、全体の情報を一度に処理する能力は右脳にあるとされている。このような点から考えると、これからの人工知能の研究には右脳と左脳の機能を統合するような新しい視点を必要としている。このような研究には、必然的に新たなコンセプトを構築することが迫られることになり、独創性が求められることになる。

人工知能の研究の応用面でも、新しいコンセプト作りが求められている。たとえば、通産白書によると、昭和65年には160万人のプログラムの必要量に対して60万人が不足し、年々不足は増大すると指摘されている。このような慢性的なプログラマ不足は、現在のような計算機言語を使用してプログラムを書く限りは解消できないと思う。人間が計算機に仕事を指示するとは、本質的にどのようなことを意味するかについて、深い考察が必要となろう。このような考察に基づいて、計算機への指示方法についての新しいコンセプトが作られないとプログラマ不足は解決されないように思う。このような新しいコンセプトの発想にも、人工知能分野の研究が貢献することを期待したい。

新しい学問の分野が立ち上がる時は過大な期待と心ない冷笑とが渦巻いて、何が本当のことなのかがわかりにくい。しかしながら、わたしは人工知能の分野で日本人が独創的な新しいコンセプトを生み出し、人間社会に大きく貢献することを期待したい。

* 株式会社東芝総合企画部